

## 野口雨情 (のぐち うじょう)

文責：蔵田勇治

1882年(明治15年)5月29日～1945年(昭和20年)1月27日)、日本の詩人、童謡・民謡作詞家。多くの名作を残し、北原白秋、西條八十とともに、童謡界の三大詩人と謳われた。本名は野口英吉、茨城県多賀郡磯原町(現・北茨城市)出身。

### <代表作>

(童謡) 「雨降りお月」、「あの町この町」、「青い眼の人形」、「赤い靴」、「兎のダンス」、「黄金虫」、「證城寺の狸囃子」、「シャボン玉」、「俵はごろごろ」、「七つの子」

その他多数

(民謡) 雨情は日本各地を旅しながら、多数の民謡を作っている。熊本県に縁するものも数多く、「火の国育ち」、「五十四万石」、「銀杏恋しや」、「白川」、「新興熊本博覧会」、「小国民謡」、「高森小唄」、「八代」・「湯の児」・「水俣」・「人吉」・「大津」・「甲佐」・「菊池」・「山鹿」・「牛深」・「本渡」の各詩、「よへほ節」、「天草民謡」など、二十余編に及ぶ。(「野口雨情 詩と民謡の旅」東 道人より)

### <野口雨情と熊本>

野口雨情研究家の東 道人氏の「野口雨情 詩と民謡の旅」によると、九州日日新聞・昭和9年9月12日付けに「野口雨情氏民謡の旅」と題し、雨情が民謡制作のため熊本各地を訪問することが報じられている。その後、県下各地(阿蘇(宮地、内牧、杖立)、大津、隈府、山鹿、高瀬、河内、熊本、日奈久、八代、人吉、天草(富岡、下津深江ほか)を訪問した記事が続く。昭和9年には小国実科高等女学校、八代高等女学校、人吉高等女学校等で講演している。

また、雨情の作詞ノート「旅の風草」にある「甲佐」と題する詩十節は昭和16年に訪れた際の作品である。その中に現在「甲佐小唄」として親しまれている次の詩がある。

「肥後の甲佐は鮎なら名所 御梁落鮎見においで」  
「明日も天気か日和瀬橋の 瀬音水音今日も鳴る」

### <甲佐高校所蔵の墨書について>

本書は「『建てた(熱・勲)は郷土のほこり 今ちや軍神名かひろく』 為県立甲佐高等女学校 雨情 (落款印)」と読める。本書の前半部分の意味は当初「地域の暑い情熱で建った甲佐高女(現甲佐高校)、その情熱は我が郷土の誇りである。」と解説していたが、「立てた軍功は郷土の誇りである。」ではないかとの情報がある。後半部分は「今では軍神(軍神と言われた西住戦車長のことと推測)の名が広く轟いている。」と解説できる。

書中にある軍神、西住戦車長とは、戦車小隊長として、昭和12年の第二次上海事変から徐州会戦中の昭和13年に流れ弾に当たって戦死するまでの間、30回以上の戦闘に参加し、昭和の軍神第1号と賞された甲佐町仁田子生まれの軍人である。彼の死後、多数の被弾痕の残る戦車が日本本土で展示され、また菊池寛による小説「西住戦車長伝」が東京日日新聞・大阪毎日新聞に連載され、昭和15年には松竹により映画化、上原謙が西住役として主演している。また、司馬遼太郎も戦後に「軍神・西住戦車長」という小説を発表している。

本書には「今ちや軍神名かひろく」とあることから、西住戦車長が新聞紙上等で軍神と賞された昭和15年近くに本書が書かれたと推測でき、昭和16年に雨情は甲佐の地を訪れ「甲佐」詩十編を作っていることから、本墨書も昭和16年に書かれたものではないかと思われる。